# 連載53 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（64歳・内科）

## “お客さまは神様です（三波春夫）” え!？患者さんですよ!!

平成20年の夏ごろ、在宅医療の依頼がありました。患者さんは昭和5年生まれの男性で、肝硬変（肝がんの合併症）で腹水がみられました。

ご自宅に訪れてみると、ケアマネジャーや介護スタッフなどの専門職の方とご家族がいらっしゃいました。そこで、私が「病状はいかがですか」と皆さんに問いかけると、介護スタッフが答えました。

「お客さまは、肝硬変でがんが合併しています。入院していた某病院の婦長さんに余命2〜3ヵ月なので退院はあまりおすすめできませんと言われましたが、本人が自宅での看取りを希望されていますので、医療面の協力をお願いしたいのです」

「わかりました。患者さんとご家族の気持ちが看取りの仕事を決定する時代です。クオリティ・オブ・ライフ、そして死生観は大切です。一生懸命ご協力させていただきます」と私は返事をしました。

その後しばらくして、患者さんの食事量が減ってきましたが、希望により点滴静注補液をし、その都度元気を取り戻していました。しかし、徐々に肝機能が低下し黄疸となりました。さらに、意識レベルが低下してきたので在宅酸素（HOT）を使用することになりました。その間の、体の清拭（せいしき）や食事介助そして服薬管理などは、ご家族と介護スタッフが一緒になり行っていました。その献身的な姿は感動的でした。やがて在宅医療開始から1年半ほど経ったころ天国へと旅立たれたのです。

患者さんが最期を迎えるころには、ご本人とご家族そして医療スタッフと介護スタッフの気持ちはすでに一体化していました。人間の寿命も「家族愛」によって確実に延びるということを、20年間の私の在宅医療経験からも実感しています。また、苦しむことなく自宅で家族に見守られながら一生を終えることは素晴らしい選択であります。

国策にて、人生の終末医療は在宅（自宅・施設）となっています。

医療・看護系では、病状がみられる人を「患者さん」とか「患者さま」と自然に呼びます。ですが、異業種から介護事業を開業された方は「お客さま」と呼びます。いずれにしても、お互い協力して患者さんの人生（命）の尊さに真摯に向き合い、介護・医療・看護を通して連携していくことが大切です。

※医療系では対象者を「お客さま」ではなく「患者さん」と呼ぶのですが、介護用品を扱う業者さんにとっては「お客さま」なのかもしれません…。

〈参考〉
日本万国博覧会（1970年3月14日〜9月13日の180日間、大阪吹田市で開催）のテーマ曲は「世界の国からこんにちは」。
三波春夫さんがこの歌を歌い世界中で有名となりました。21歳だった団塊世代の私でしたが、三波春夫さんといえば、当時「お客さまは神様です」の有名フレーズで、広く知られていたのです。そのフレーズが私の頭に浮かんだのでした。

「お医者さんが来てくれる」
24時間・365日態勢で対応（松山市全域）
私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。

医師数 18名
（常勤6名、非常勤12名）
内科・外科専門医 15名
（国立がんセンター勤務歴有3名）
精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
（ペインクリニック科）
末期がん治療（緩和ケア）相談室開設!

Hyper Blood Viscosity（高血液粘度群）を科学する
臨床生命科学（体質・病態学、栄養学）研究所開設
機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/